

「けっけっけっけ」と「しんから幸せ」

一徹国語人

文学教材をどう読み味わわせるか

昔、光村の五年生の教科書に「三人の旅人たち」という物語があった。どこの学校でも、どのクラスでも、この教材を学習すると議論になった。そのテーマが「けっけっけっけ」しんから幸せ」というものである。

なぜか、東西に伸びた長い長い鉄道の東の端は海で、西の端は大会という設定だった。その中間とおぼしき地点に駅があるのだが、砂漠の真っ只中で、どちらから来る列車もこの駅には止まらないのだ。

駅には三人の駅員がいたのだが、まるで客の乗降がないので、自分たちが客になって列車を止めようということになる。信号手とポイント係と出改札係の三人は、考えた結果、それぞれの行き先を決めた。

最初の旅人はジョーンズという人で、東の果てまで行って水族館に入ったり水泳を楽しんでみたりして戻ってきた。一番目に出かけたのはスミスさん。この人は逆に西の端まで行って映画を見たりレストランでおいしいも

のを食べたりして帰ってきた。二人ともそれらしい土産を持って帰って仲間たちに渡し、行った先の楽しかったことを得意になって話した。

三番目に出かけたのはブラウンさん。「けっけっけっけ」な体験をして戻った二人に向かって、「ぼくは北に行ってみよう、歩いて。」と宣言する。ブラウンさんは駅からまっすぐ北に向かって歩いていき、オアシスを発見する。

やがてその砂漠駅の本ームには、『オアシスは当駅下車』という案内表示の看板が立つことになる。

三人は日曜日になると、そろってオアシスでのバカンスを楽しむようになったという。

「三人はしんから幸せだった」とはひと言も書かれていないが、想像に難くない。

なんとかランドで楽しんだり、デパートへ出かけたたりといった生活も「けっけっけっけ」な生活ではあるが、生きがいとなるような仕事ができることには比べべくもない。

いと作者は断じているようである。

一時、軽薄な奴のことを「スミスさん」とあだ名し、沈着で思慮深い奴のことを「ブラウンさん」と仮称したりするのが五年生の間ではやったりした。

どっけっけっけ、この教材が載らなくなって久しい。

一徹国語人のわたしは今、四国遍路の旅をしている。

八十八か所の寺々は、街の中にあつてわりと近くにかたまっている場合もあるが、山また山を越えなければ次のお寺には着かないというほど離れている場合も少なくない。

まさにジョーンズさんが「けっけっけっけ」に楽しんだやうなところもあるし、スミスさんが「けっけっけっけ」と感じたような場所もある。

さて、問題はブラウンさんの村のことである。そこには有名な 番札所があり、観光バスが一日中、ひっきりなしに人を乗せてやってくる。

納経所という所へ写経紙を納め、納経帳にご朱印をもつ。納札という紙片に氏名を書いて納札箱に入れる。昔の札打ちの代わりである。

遍路さんたちは、てんでに香華をしたりローソクをともしたり賽銭を入れたりする。納経帳でもお金がかかる。どの札所も改修・新築がめざましい。遍路は、オアシ

スにバカンスを楽しむに來る人と同じかもしれない。

この人々を当てにして宿坊を整備したり、民宿屋や土産物屋、ワンボックス型タクシーが走ったりなど、関連サービス業がどんどん広がっていくようにも思えるのだが、村々の若者たちは皆、スミスさんになって戻ってこないという。

村々は老人ばかりになり、なんとか自分たちで、若者がいなくなった田畑を守るうとするのだが、山中のオアシスは労力ばかりを要してさしたる収入にもならないところである。

全体に、国語の教科書に出てくる物語や詩は、現実を直視していないものが多い。美しい心、優しい心を育てたいとは思っただが、街中の若者にも林間田舎の若者にも、「けっけっけっけ」な生き方があこがれの的になってしまっただけ、「しんから幸せ」のほうは見向きもされないので現状なのである。

社会科教室ではリアルにそれを学んでいるのに、国語教室を経営する同じ教師は、存外絵空事をそのまま読み味わおうとさせてはいないだろうか。

昭和五十五年〜平成三年まで小学校五年の教科書教材。

現在は、『光村ライブラリー・第14巻』に収録されている。